

8月・月例研修会報告

原生的な苔むす西大台を歩く

中井 弘

8月7日(火)、参加者は28名。台風13号の影響で昨日までの快晴から一転してどんよりした天気である。大台ドライブウェイからは、大峰山脈の大パノラマが見えるのだが、残念ながら厚い雲に覆われている。

大台ヶ原は1500m前後の高原状台地で、吉野熊野国立公園に属する。

最高峰の日出ヶ岳(1695m)がある東大台と原生的な森林が広がる西大台に分けている。

西大台は利用調整地区となっており、入山制限がある。事前予約と大台ビジターセンターでの事前レクチャーを受けねばならない。1グループ10人までの規制があり、3班に分かれて入山する。

大台教会前からブナの樹林帯を緩やかに下っていくと、花期の過ぎたバイケイソウの群生するナゴヤ谷の明るい川原に出た。

「松浦武四郎」の道標がある。松浦は蝦夷の探検家で知られる。ロシアの蝦夷地への進出を恐れ、江戸幕府の命を受けて徹底調査し、明治になって「北海道」と命名したとされる。日本山岳会の山岳誌によると、幕末から明治にかけて大台ヶ原を世に紹介した先人であり、遺言により、こよなく愛した故郷の山・大台ヶ原のナゴヤ谷の上にある御霊岡に分骨埋葬されたとある。

中の谷の徒渉地点でA・B・C班が一同に合流し昼食とする。

A班が先発する。ブナが群生する七つ池を過ぎる。道は固定ロープや踏み跡をたどれば迷うことはない。



大台ヶ原は日本有数の多雨地帯で、太平洋の湿潤な空気が山脈に当たり大量の雨を降らせる。この雨が苔むすトウヒやブナの原生林を育て、スギゴケなど厚い苔類が岩や大地に繁茂する。

霧が湧き上がってくる。霧に煙る原生林は幻想

的で幽玄な風景である。しっとりしたコケ類の緑が大地をおおっている様子は実に美しい。

カツラ谷を渡ると、高野谷沿いの平坦な「開拓跡」に出る。明治2年から2年にわたって、京都宇治の興正寺・寺侍ら開拓団が蕎麦・粟・稗・大根・馬鈴薯などを栽培したが失敗したという。

開拓跡を過ぎると水が溜まった大きな湿地帯があり、バイケイソウの群生地だがやはり花期を終わっている。ここは西大台コースの最奥地点で、駐車場に戻る周遊コースに入る。

高野谷に架かる赤い吊橋を渡ると、ここからはガレ場の急な登りが続き、なかなかきつい。やがて巨大な巖の下から流れ出る湧水があり「たたら力水」と名付けられ、実に甘露である。一息つく。

霧が薄れはじめ、中の谷の木橋が明るく浮かび上がってきた。幽玄な美しさに感嘆の声が上がる。

最後の登りが胸突き八丁である。喘ぎながら登り切った所が「大台教会」である。かつては宿泊もできたようで、深田久弥も泊まっている。前出の「山岳誌」には「全く信仰の対象にならなかったこの山に大台教会が建ったのは1899年8月であった。岐阜県郡上市出身の古川嵩が縁あって教派神道一派、神習教の分教会「福寿大台教会」を建て、天地開闢(てんちかいびやく)の三神、天御中主神(アメノミナカヌシノカミ)、高皇産霊神(タカミムスヒノカミ)、神皇産後霊神(カンムスヒノミコト)ほか天神地祇を祀った。」とある。余談だが東大台の牛石ヶ原に古川嵩が建立した神武天皇の銅像が建っている。これは神大和磐余彦命(カムヤマトイワレヒコノミコト)一隊が熊野から大和に入る途中、この辺りで道に迷い、八咫鳥(ヤタガラス)に導かれて危地を脱したという。

我がB班はC班に追い越されたが、それでも駐車場には予定時間



より30分早い16:10に帰着した。所要時間5時間40分。コース全体が樹林帯の中で、深山の靈気を感じながらの清々しい山行であった。